

# NH-chat README

作成者：奥野 尚己

2021 年 6 月 21 日

## 1 NH-chat の概要

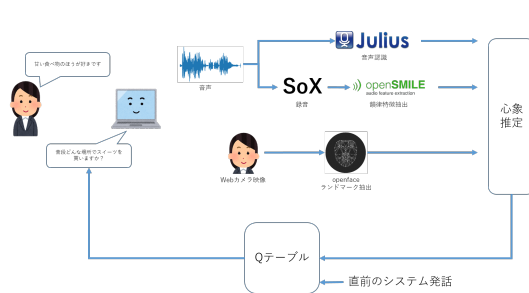


図1 従来の NH-chat

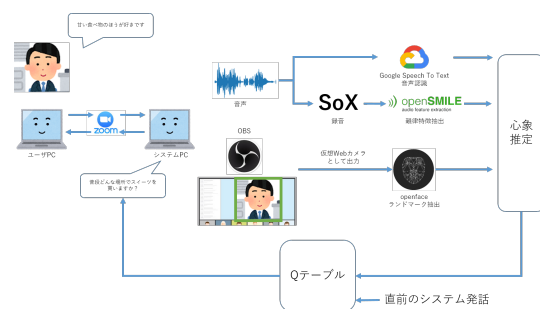


図2 遠隔 NH-chat

NH-chat とは MMDAgent を用いた音声対話システムである。従来の NH-chat の構成を図 1 に示す。NH-chat の対話におけるシステム発話選択には言語情報，韻律情報，顔画像情報が用いられている。これらの情報を用いて推定されたユーザ心象と過去のシステム発話などを学習済み Q テーブルに入力し，次のシステム発話を選択している。従来の NH-chat では言語情報は Julius 音声認識を，韻律情報は openSMILE を，顔画像情報は OpenFace をそれぞれ用いて取得している。韻律情報取得の前段階として，ユーザの音声を SoX を用いて録音している。従来の NH-chat はシステムの動作する PC と対面した状態で使用されることを前提としている。ユーザの顔画像は Web カメラの映像を取得することでシステムに入力される。

遠隔 NH-chat は遠隔かつ自動で対話データを収集することを目的に作成したシステムである。遠隔 NH-chat の構成を図 2 に示す。従来のシステムとの違いは，音声認識に Google Speech To Text を用いる点と，被験者が遠隔で参加する点である。顔画像情報の取得には OBS の仮想 web カメラ機能を用いている。具体的には，Zoom で被験者が映るウィンドウを OBS でキャプチャし，OBS の機能である仮想 web カメラ出力で出力した映像を OpenFace に入力することで顔画像情報を得ている。

本テキストで導入するシステムは、従来の用途（対面して web カメラを使用する方法）でも遠隔でも使用できる。本テキストではシステムの動作に必要なアプリ、モジュールのインストール方法、セットアップ方法、プログラムの実行方法を示す。

## 2 動作環境

開発は windows10 で行った。windows8.1 でも動作確認を行った。アプリのバージョンは以下の通りである。

- MMDAgent 1.7
- MMDAgent Sample Script 1.8
- MMDAgent ソケット通信プラグイン 0.2.2.0
- openSMILE 3.0
- OpenFace 2.2.0
- Google Cloud SDK
- OBS 27.0.0
- OBS VirtualCam 2.0.4
- Voicemeeter Banana 2.0.5.8
- SoX 14.4.2
- dictation-kit(Julius) 4.5

テスト環境では Python3.6 を使用している。テスト環境で使ったモジュール等についての詳細は以下の導入手順 3.1 節でクローンしたリポジトリ内 `setup/NH-chat.env.yml` に記載されている。3.2.2 節の手順に従えばテスト環境と同じバージョンのモジュールが一括でインストールできる。

## 3 導入手順

NH-chat を導入する手順を示す。導入の大まかな手順は以下の通りとなる。

1. git hub からリポジトリをクローン  
プログラムファイルや学習済みモデルなどをダウンロードする
2. conda を用いた仮想環境の構築  
開発者のテスト環境と同等の環境を構築する
3. 必要なアプリ等のダウンロード

各工程の詳細を以下に示す。

### 3.1 git hub からリポジトリをクローン

以下のコマンドを実行し git hub からリポジトリをクローンする.

```
git clone https://github.com/elprimo041/NH-chat.git
```

フォルダ構造および各ファイル, フォルダの機能を本資料の末尾に記載する.

### 3.2 conda を用いた仮想環境の構築

開発者環境を再現するために conda を用いる. conda を用いて仮想環境を構築すると, 開発環境と同じバージョンの Python, モジュールを一括でインストールすることができる. まず miniconda をダウンロードし, 次にクローンしたリポジトリ内にある環境情報が記載されたファイル (setup/NH-chat.env.yml) を使用して開発環境と同等の仮想環境を構築する.

#### 3.2.1 miniconda のインストール

すでに Anaconda や miniconda がインストール済みで conda コマンドが使用できる場合はこの工程をスキップする.

以下のリンクから miniconda をインストールする.

```
https://docs.conda.io/en/latest/miniconda.html
```

miniconda インストール時の Python のバージョンは任意のものでよい. ここで選択した Python のバージョンはシステム実行時に使用されるものとは異なるためである. 次の工程で開発者と同じバージョン (Python3.6.10) が自動的にダウンロードされる.

コマンドプロンプトで conda コマンドを実行するためにパスを通す. (環境変数 Path に以下を追加)<sup>1)</sup>

```
path.to.miniconda3/Scripts
```

コマンドプロンプトで conda と入力しコマンドが認識されていることを確かめる.

#### 3.2.2 仮想環境の構築

コマンドプロンプトでクローンした NH-chat/setup フォルダに移動する. (NH-chat.env.yml のあるフォルダ) 以下のコマンドを実行し仮想環境を構築する.

```
conda env create -n NH-chat -f NH-chat.env.yml
```

システムの実行に必要な Python とモジュールが一括インストールされる.

### 3.3 必要なアプリ等のダウンロード

NH-chat の動作に必要なアプリのダウンロードを行う. 導入するアプリは MMDAgent, openSMILE, OpenFace, Google Cloud SDK, OBS の5つである. Julius 音声認識を使用する場合は dictation-kit の導入が追加が必要となる.

---

1) パスの追加方法: <https://www.atmarkit.co.jp/ait/articles/1805/11/news035.html>

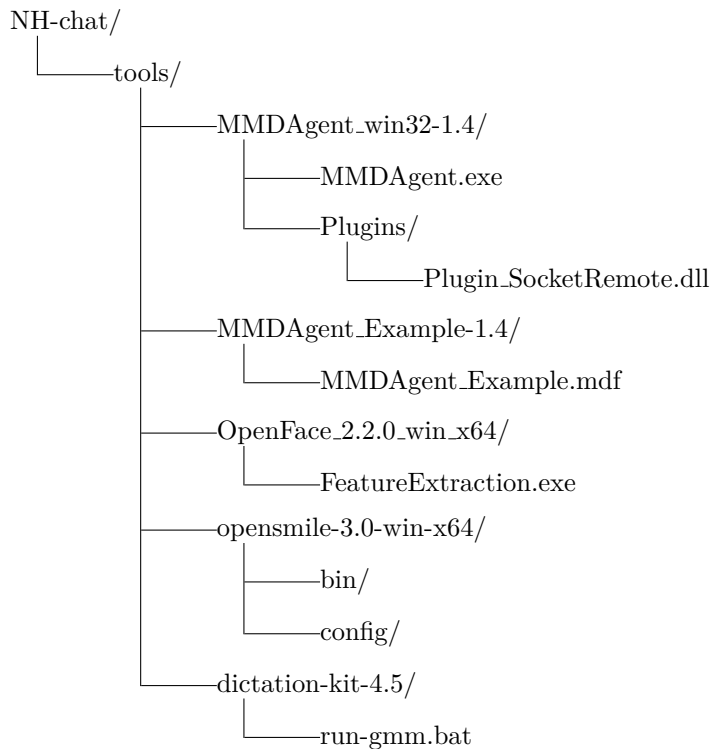


図3 アプリ導入後のフォルダ構造

MMDAgent, openSMILE, OpenFace はダウンロードした zip ファイルを NH-chat/tools に展開する。展開後のフォルダ構造は図3 のようになる。

### 3.3.1 MMDAgent のダウンロード

MMDAgent の本体, サンプルプログラム, ソケット通信用プラグインをダウンロードし, MMDAgent が使用できる環境を構築する。

必要なファイルを以下の手順でダウンロードする。まず下記のリンクから MMDAgent の本体をダウンロードする。

[https://ja.osdn.net/projects/sfnet\\_mmdagent/downloads/MMDAgent/MMDAgent-1.4/MMDAgent\\_win32-1.4.zip/](https://ja.osdn.net/projects/sfnet_mmdagent/downloads/MMDAgent/MMDAgent-1.4/MMDAgent_win32-1.4.zip/)

次に下記のリンクから MMDAgent のサンプルプログラムをダウンロードする。

[https://ja.osdn.net/projects/sfnet\\_mmdagent/downloads/MMDAgent\\_Example/MMDAgent\\_Example-1.4/MMDAgent\\_Example-1.4.zip/](https://ja.osdn.net/projects/sfnet_mmdagent/downloads/MMDAgent_Example/MMDAgent_Example-1.4/MMDAgent_Example-1.4.zip/)

MMDAgent のソケット通信用プラグインを以下のページからダウンロードする。

[https://ux.getuploader.com/cube370/download/15/Plugin\\\_SocketRemote.zip](https://ux.getuploader.com/cube370/download/15/Plugin\_SocketRemote.zip)

それぞれのファイルを NH-chat/tools に展開する。

次に NH-chat/tools/MMDAgent\_Example.fst をコピーし, NH-chat/tools/MMDAgent\_Example-1.4/ にコピーする (同名ファイルを置き換える)。最後に, ソケット通信を行えるようにするために, MMDAgent 本体の Plugins フォルダに Plugin.SocketRemote.dll をコピーする。フォルダ構造

が図3のようになっていることを確かめる。

### 3.3.2 OpenFace のダウンロード

以下のリンクから OpenFace をダウンロードし NH-chat/tools に展開する。

[https://github.com/TadasBaltrusaitis/OpenFace/releases/download/OpenFace\\_2.2.0/OpenFace\\_2.2.0\\_win\\_x64.zip](https://github.com/TadasBaltrusaitis/OpenFace/releases/download/OpenFace_2.2.0/OpenFace_2.2.0_win_x64.zip)

ダウンロードした OpenFace には顔画像の推定に用いるモデルが付属していない。モデルをダウンロードするために download\_model.ps1 を右クリックし Power Shell で実行する。

Windows の設定次第では Power Shell でのスクリプトの実行が許可されていない場合がある。その場合、以下の手順で今回に限り許可を与える。

1. Power Shell を立ち上げる
2. download\_model.ps1 のあるフォルダ (NH-chat/tools/OpenFace\_2.2.0/) に移動
3. 下記コマンドでスクリプトの実行許可を一時的に付与  
Set-ExecutionPolicy Unrestricted -Scope Process
4. 下記コマンドでスクリプトを実行. \download\_models.ps1

### 3.3.3 openSMILE のダウンロード

以下のリンクから opensmile をダウンロードし NH-chat/tools に展開する。

<https://github.com/audeering/opensmile/releases/download/v3.0.0/opensmile-3.0-win-x64.zip>

### 3.3.4 Google 音声認識の導入

Google 音声認識を使用するには GCP に登録し API キーを含む json ファイルを取得する必要がある。奥野と同じ json ファイルを使用する場合、以下の 1-4 の操作は不要。5 の操作はどちらの場合でも必要となる。奥野とは別のアカウントで Google 音声認識を使用する場合は GCP(Google Cloud Platform) への登録が追加で必要となる。新たなアカウントで json ファイルを取得する手順は以下の通り。

1. Google アカウントを作成し、GCP コンソールにログインしてプロジェクトを作成する
2. Google Speech-to-Text API を有効にする
3. 「認証情報」を選択し、「認証情報を作成」から「サービスアカウントキー」をクリックして、json ファイルを作成し、任意の場所に保存する。この json ファイルを読みこむことによって API サービスを使うことができる。
- 4.
5. 環境変数を以下のように設定する。

変数名: GOOGLE\_APPLICATION\_CREDENTIALS

値: 取得した json ファイルの絶対パス

### 3.3.5 OBS のインストール

ライブ配信用ソフトである OBS をインストールする。OBS を用いると、Zoom の被験者が映る画面をキャプチャし、OpenFace が読み込める仮想 Web カメラの形式で出力することができる。下記のリンクから OBS のインストーラをダウンロードする。(開発者環境はバージョン 27.0.0)

<https://github.com/obsproject/obs-studio/releases/>

インストーラを実行し、OBS をインストールする。

OBS で仮想 Web カメラを使うために下記のリンクからプラグインをダウンロードする。<https://obsproject.com/forum/resources/obs-virtualcam.539/> インストーラを実行し、仮想 Web カメラプラグインをインストールする。OBS 27.0.0 ではデフォルトで仮想 Web カメラ機能が搭載されているが、デフォルトの機能ではなぜか OpenFace に入力できない。(黒い画面が読み込まれる?) プラグインで仮想 Web カメラ映像を出力すると OpenFace で読み込める。

### 3.3.6 SoX のインストール

下記のリンクから SoX のインストーラをダウンロードする。(開発者環境はバージョン 14.4.2)

<https://sourceforge.net/projects/sox/files/sox/>

インストーラを実行し、SoX をインストールする。コマンドプロンプトで sox コマンドを実行するために環境変数 Path にインストールフォルダを追加する。インストールフォルダはデフォルトでは C:/Program Files (x86)/sox-xx-x-x。

### 3.3.7 Voicemeeter Banana のインストール

仮想ミキサである Voicemeeter Banana をダウンロードする。Voicemeeter Banana を用いることで、音声の入出力を一括管理でき、音声認識の対象から MMDAgent 自身の声を除くことができる。下記のリンクから Voicemeeter Banana のインストーラをダウンロードする。(開発者環境はバージョン 2.0.5.8)

<https://vb-audio.com/Voicemeeter/banana.htm>

インストーラを実行し、Voicemeeter Banana をインストールする。

### 3.3.8 dictation-kit のダウンロード (任意)

Julius 音声認識を利用しない場合はスキップ。

以下のリンクから dictation-kit-4.5 をダウンロードし NH-chat/tools に展開する。

<https://osdn.net/projects/julius/releases/66544>

## 4 セットアップ

導入したアプリの一部は、対話を行うために以下の項目について準備が必要である。

- 音声入出力の設定
- 組み込み Web カメラと仮想 Web カメラのデバイス番号取得

これらの項目についてセットアップ手順を示す。

### 4.1 音声入出力の設定



図4 VoiceMeeter Banana を用いた音声の入出力関係

本システムの実行時には音声入出力の制御が必要である。例えば音声認識モジュールには被験者の音声のみが入力され、実験オペレータや MMDAgent の音声は入力されないことが必要である。このような本システムで実現すべき音声の入出力関係を図4に示す。このような入出力関係の実現に VoiceMeeter Banana を用いる。まず、VoiceMeeter Banana の機能を解説し、次にセットアップの手順を示す。

#### 4.1.1 VoiceMeeter Banana の機能

本システムで音声の入出力関係を制御するのに用いている VoiceMeeter Banana の機能を解説する。図5は VoiceMeeter Banana の画面と本システムにおける機能を表している。

画像右上 (黄色の部分) の HARDWARE OUT は VoiceMeeter Banana からのハードウェア出力デバイスを制御している。本システムでハードウェア音声出力が必要なのは実験オペレータが使用するスピーカーのみである。なので、A1 に実験オペレータが使用するスピーカーを指定する。



図5 VoiceMeeter Banana の機能

画面中央の VIRTUAL INPUTS は VoiceMeeter Banana の 2 つの仮想入力である VoiceMeeter Input と VoiceMeeter Aux Input の出力を制御している。本システムでは、VoiceMeeter Input(緑の部分) にシステム音 (MMDAgent の音声) が、VoiceMeeter Aux Input(オレンジの部分) に被験者の音声が入力されるように設定を行う。

画面左側の HARDWARE INPUT は VoiceMeeter Banana に入力するハードウェア入力デバイスを制御している。本システムでハードウェア音声入力が必要なのは実験オペレータが使用するマイクのみである。なので、HARDWARE INPUT1(青の部分) に実験オペレータが使用するマイクを指定する。

VIRTUAL INPUTS や HARDWARE INPUT の下側は入力された音声をどの出力先に出力するかを制御している。A1-A3 は画面右上で設定したハードウェア出力デバイスを表している。今回は A1 のみデバイスを設定している。例えばシステム音 (MMDAgent の音声) を実験オペレータが聞こえるようにするためには、VoiceMeeter Input(緑の部分) の A1 をオンにすれば良い。

B1 と B2 はシステムの出力を表している。B1 は Windows の規定のデバイスを表している。本システムでは規定のデバイスを VoiceMeeter Output に設定する。B2 は既定の通信デバイスを表している。本システムでは既定の通信デバイスを VoiceMeeter Aux Output に設定する。音声認識モジュールは規定のデバイスの音声 (=B1) のみを読み込む。なので、被験者の音声を音声認識モジュールに入力するには被験者の音声が入力される VoiceMeeter Aux Input(オレンジの部分) の B1 をオンにすれば良い。





図 6 VoiceMeeter Banana

#### 4.1.2 音声入出力の設定

設定後の画面は図 6 のようになる。まず、VoiceMeeter Banana を起動し、右上 HARDWARE OUT の A1 で実験オペレータが使用する出力機器を指定する。デバイス指定の際、同じ機器について WDM や MME、KS などの選択肢がある場合があるが、そのような場合は WDM を選択する。(WDM が一番低遅延らしい) 次に Virtual INPUTS の VOICEMEETER VAIO について A1 と B2 を指定する。次に Virtual INPUTS の VOICEMEETER AUX について A1 と B1 を指定する。最後に HARDWARE INPUT1 で実験オペレータが使用するマイクを指定し B2 をオンにする。WDM や MME、KS などの選択肢がある場合は WDM を選択する。

以下 VoiceMeeter Banana 以外の設定の手順を示す。

まず、Windows のサウンド設定を開く。(コントロールパネル→ハードウェアとサウンド→サウンド) 再生タブで以下のように設定する。

VoiceMeeter Aux Input:既定の通信デバイス

VoiceMeeter Input:既定のデバイス

録音タブで設定を以下のように変更する。

VoiceMeeter Aux Output:既定の通信デバイス

VoiceMeeter Output:既定のデバイス

ズームでマイクとスピーカーを以下のように設定する。

マイク: VoiceMeeter Aux Output

スピーカー: VoiceMeeter Aux Input

## 4.2 Web カメラのデバイス番号取得



図7 OBSを用いたOpenFaceへの映像入力方法

OBSを用いたOpenFaceへの映像入力のフローを図7に示す。OpenFaceでWebカメラの映像を入力するには、Webカメラを識別するためのデバイス番号をオプションで指定する必要がある。<sup>2)</sup> 今回のシステムで使用する、組み込みWebカメラと仮想Webカメラに対応するデバイス番号は実行環境によって異なるので、デバイス番号を確かめ、コードの該当する部分を書き換える必要がある。

Webカメラのデバイス番号を確かめるために、以下の手順で入力するデバイスを変更しながらOpenFaceを実行する。

1. OBSを起動し、トラッキング対象の画面をキャプチャする  
導入テスト時は映像キャプチャデバイスで組み込みwebカメラの映像を取り込むとよい<sup>3)</sup>
2. 図11のように仮想Webカメラの出力を開始する  
ツール→VirtualCam→start  
デフォルト機能であるコントロールパネル内仮想カメラ開始ではないので注意
3. コマンドプロンプトでOpenFaceのFeatureExtraction.exeがあるフォルダ(NH-chat/tools/OpenFace.2.2.0.win\_x64)に移動する
4. 以下のコマンドをデバイスオプションの数字を変更しながら実行する  
FeatureExtraction.exe -cam.width 960 -cam.height 540 -device {DEVICE\_NUM}  
開発者環境では、組み込みWebカメラのデバイス番号が0、仮想Webカメラが2  
組み込みWebカメラのデバイス番号を調べる際はOBSの出力を停止する

調べたデバイス番号をNH-chat/src/Interface/tools.pyの該当箇所に記載する。

CAMERA\_NUM\_OFFLINE = { 組み込み Web カメラのデバイス番号 }

CAMERA\_NUM\_ONLINE = { 仮想 Web カメラのデバイス番号 }

2) OpenFace オプション一覧:<https://github.com/TadasBaltrusaitis/OpenFace/wiki/Command-line-arguments>

3) OBS 操作方法: <https://vip-jikkyo.net/how-to-use-obs-studio>

## 5 モジュールの導入，動作確認

コマンドプロンプトで NH-chat/setup フォルダに移動し，下記のコマンドで仮想環境を起動する．

```
conda activate NH-chat
```

Conda 環境が有効になると，行の最初に (NH-chat) が表示される．

intro\_confirm.py を実行すると環境構築が正しくできているか確かめられる．MMDAgent は初回起動時，実行許可が必要．

## 6 プログラムの実行

### 6.1 実行コマンド



図 8 Zoom:被験者画面最大化

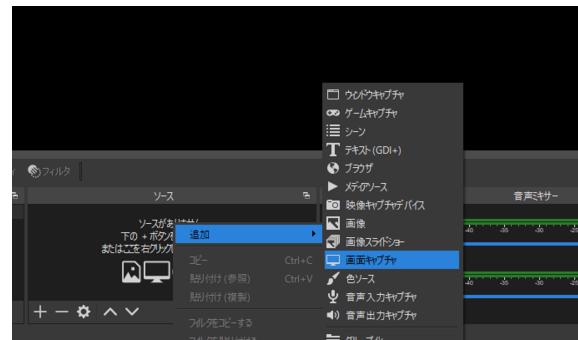


図 9 OBS:画面キャプチャの追加



図 10 OBS:範囲指定

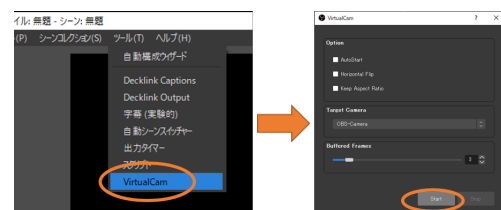


図 11 OBS:仮想 Web の開始

実行前に必要なアプリケーション (zoom, OBS, Voicemeeter Banana) を起動する必要がある．実行コマンドは以下の通りである．

---

```
cd path-to-NH-chat/NH-chat/src
conda activate NH-chat
python nh_chat.py [options]
```

---

オンラインモードで起動した場合、コマンド実行後以下の手順で zoom の被験者が映る範囲の画面をキャプチャする必要がある。

1. zoom で MMDAgent を画面共有する
2. 図 8 のように被験者の映る画面を可能な限り大きくする
3. 図 9 のように OBS でソースに画面キャプチャを追加する
4. 図 10 のように被験者の映る範囲を指定する (alt+ドラッグ)
5. 図 11 のように仮想 Web カメラの出力を開始する  
ツール→ VirtualCam → start  
デフォルト機能であるコントロールパネル内仮想カメラ開始ではないので注意

## 6.2 オプション

以下のコマンドを実行することでオプションの一覧を確認することができる。

```
python nh_chat.py -h
```

以下の出力が得られる。

---

```
usage: nh_chat.py [-h] [--model MODEL] [--mode MODE] [-u USER]
                  [--turn_num TURN_NUM] [--text TEXT]
                  [--asr_module ASR_MODULE]
                  [--response_time_no_word RESPONSE_TIME_NO_WORD]
                  [--turn_buffer TURN_BUFFER] [--asr_conf ASR_CONF]
                  [--is_debug IS_DEBUG]
```

```
nh_chat.py [Args] [Options] Detailed options -h or --help
```

optional arguments:

-h, --help	show this help message and exit
--model MODEL	強化学習モデル名 (default:200117_c099)
--mode MODE	実行モード. online か WebCamera(default:WebCamera)
-u USER, --user USER	ユーザ名 (default:tmp_user)

```
--turn_num TURN_NUM    ターン数 (default:3)
--text TEXT             テキストで対話を行うか (default:False)
--asr_module ASR_MODULE
                        音声認識モジュール. google か julius (default:google)
--response_time_no_word RESPONSE_TIME_NO_WORD
                        ユーザターン開始後ユーザが発話しない場合, どの程度待つてター
                        ンテイキングを行うか (default:6.0)
--turn_buffer TURN_BUFFER
                        ユーザ発話の音声認識が確定した後, どの程度待つてターンテイキ
                        ングを行うか (default:1.5)
--asr_conf ASR_CONF     初期化時に音声認識テストを行うか (default:False)
--is_debug IS_DEBUG, --debug IS_DEBUG
                        デバックモードで実行するか (default:False)
```

---

## 6.3 実行時のフロー

### 6.3.1 初期化

nh\_chat.NH-chat.\_init\_で対話に必要な初期化を行う. init 内では以下の操作が行われる.

- モデルの選択
- ベースタイムの取得
- 強化学習環境の初期化 (RL.dialogue\_env.DialogueEnv)
- エージェントの初期化 (RL.agent.TrainedQlearningAgent)
- Q テーブルの読み込み
- テーマの初期化 (..RL.theme.HistoryTheme)
- OpenFace の開始 (Interface.tools.OpenFace.start)

### 6.3.2 メインループ

nh\_chat.NH-chat.run で指定したターン数メインプロセス (nh\_chat.NH-chat.process) を回す. nh\_chat.NH-chat.process では以下の処理が行われる.

- テーマ変更の判断, テーマ変更 (RL.theme.HistoryTheme.decideNextTheme)
- システム発話生成 (RL.dialogue\_env.DialogueEnv.utterance\_selection\_softmax)
- システム発話 (Interface.tools.MMDAgent.say)
- システム発話ログの記録 (nh\_chat.NH-chat.record\_log)

- 音声認識 (google\_asr.GoogleASR.start)
- 録音開始 (Interface.tools.Record.start)
- ユーザターン終了判定開始 (manage\_turn.start\_turn\_thread)
- ユーザ発話ログの記録 (nh\_chat.NH-chat.record\_log)
- 韻律特徴抽出 (Interface.tools.OpenSmile.start)
- ユニモーダル心象推定 (nh\_chat.NH-chat.predict\_\*→ RL.predUI.predUnknown)
- マルチモーダル心象推定 (RL.predUI.predUnknown)
- 状態更新 (RL.dialogue\_env.DialogueEnv.get\_next\_state)
- 終了判定

### 6.3.3 対話終了後

- システム発話ログの保存 (nh\_chat.NH-chat.save\_log)
- モジュールの終了 (Interface.tools.\*.end)

## フォルダ構造

